

1	SE	歩行(柔遅)
2	一ノ瀬	暗闇の中を歩く
3	一ノ瀬	どれだけ歩いているのか。どれだけ進んだのか。 気づいたらここにいた自分には分からない
4	一ノ瀬	空——を見上げてみても、真っ暗な闇が広がっているだけで、 月も、星の明かりも見えない。いや、そもそもここは外なのか、建物の 中なのか、そこからもって怪しい
5	一ノ瀬	風に頬を撫でられることも、流れる音もない。 それでも靴の底、足の下から伝わる感触だけは確かだ。 青々とした芝生を踏みしめているような土と草の感触
6		
7	一ノ瀬	色も無ければ音も無い。そんな世界に自分の心音だけが響く。 やけにうるさいそれを無視して感覚だけを頼りに足を動かし続ける
8	一ノ瀬	一体どこに向かっているのか。その目標も目的も分からない。 分からないけれど、とにかく進まなければと胸の奥から突き上げる 衝動に心臓の鼓動だけが早くなっていく
9	SE	鈴系の音
10	みちる	……ク
11	SE	心音大
12	一ノ瀬	っっ！
13	SE	鈴系の音
14	みちる	……タク

15	SE	場面切り替え
16	一ノ瀬	……っ……
17	SE	歩行/柔遅
18	一ノ瀬	ハハハ……は……
19	一ノ瀬	気づけば真っ黒だった世界は終わり、世界は月明りに満ちていた
20	一ノ瀬	薄ぼんやりとしていた意識が次第に輪郭を露わにしていく
21	一ノ瀬	「草、原（そう、げん）？ どこかの公園かな……？ どうしてこんなところに」
22	一ノ瀬	明かりを得ても目的はやっぱりはっきりしない。 ただ、足の裏から伝わる柔らかな感触はさっきまでと同じものだった
23	一ノ瀬	「ずっと歩いてきた、のか？」
24	一ノ瀬	無意識に動かし続けていた足を止め後ろを振り返る。 道路や電柱でも見えないかと期待したけれど、 いくつもの起伏が連なった原野が果てもなく続いているだけだった。 山深くて雪の無いスキー場、といったらいんだろうか
25	一ノ瀬	仮にスキー場だったとして、これだけ開けているのなら リフトや電線の端くらい見えても良さそうんだけど……
26	SE	歩行/柔遅
27	一ノ瀬	原野は下ったり上ったりを繰り返しながら少しずつ高くなっている。 なら、戻ってあの高い丘に登ればその一端くらい見えるかもしれない。 あるいは、この坂を越えれば遠くの街明かりだって見下ろせるのかもしれない

28	一ノ瀬	どちらが正解かは分からないけれど、とにかく進まなくちゃいけないような気がする。それだけは確かだ
29	一ノ瀬	聞いたことがあるような、やっぱりどこか違うような蟲達の声が途絶えた時だった
30	一ノ瀬	「壁……？ いや、あれは……」
31	一ノ瀬	斜面の先、月空へ伸びるようにそれは現れた
32	一ノ瀬	中世の城壁を思わせる尖塔を両端（りようはし）に構えた白塗りの門。これだけの山奥だというのに門や連なる壁の周囲には水路が敷かれ、門へ続く跳ね橋が訪問者を拒むようにその道を閉ざしていた
33	一ノ瀬	昇ってくる時は壁の向こうにも建物が見えた気がしたけど、近くからだと言壁が高くて中の様子は全く窺い知れないな。人がいればいいんだけど
34	一ノ瀬	他にアテがあるわけじゃないし、少し辺りを周ってみよう
35	SE	場面切り替え
36	SE	水路（水がゆるやかに流れる音）
37	一ノ瀬	はいは、水路が途絶えてる
38	一ノ瀬	跳ね橋の裏手に回ると、壁の内側へ引つ込むように水路が窪んでいた。地続きになった壁には小さな扉がついている。どうやら勝手口のようなだ
39	一ノ瀬	「どうにか入れないかな。いや、いきなり訪ねるのもそれはそれで問題があるかもしれないし……」
40	弥彦	「おや？ これは珍しいお客さんだ」

41	一ノ瀬	「っ!？」
42	弥彦	「驚かせてしまいましたか。 そんなつもりは無かったのですが、失礼しました」
43	一ノ瀬	突然背後から響いた声に振り向くと 一人の男が柔和な笑みを浮かべて立っていた。掲げられたランプ の灯が眼鏡に反射しその瞳までは窺い知れないけれど
44	一ノ瀬	「い、いえ。こちらこそすみません」
45	弥彦	「何か忘れ物ですか？　ここまで戻らずとも三門（さんもん）で 呼び出していただければ——ふむ。見慣れない服装ですね。 どこかの制服のようですが、トリウィウムでは見たことのないものだ。 ……大変失礼ですが、どちらから？」
46	一ノ瀬	「あ、いや、えっと、怪しい者じゃ、ないんです ……と言つてもどこからどう見ても怪しいと思いますが……」
47	一ノ瀬	改めて自分の恰好を見返してみる。あんな山道を歩いてきたからか 足元は泥だらけだし、着ている制服も途中で枝に引っ掛けたのか 擦り傷だらけだった
48	一ノ瀬	そもそもなんでこんなふざけた格好で山に深入りしているんだ自分は ……
49	一ノ瀬	自分でもさっぱり分からないのに説明できるわけがない。 適当にごまかすか？　いやごまかすにも情報が少なすぎる…… 下手なことを言ったら余計怪しまれるだけだろうし
50	一ノ瀬	「すみません……。自分でもよく分からないんです……」
51	一ノ瀬	結局、口をついて出たのは諦め混じりのため息だった
52	弥彦	「分からない、ですか」

53	一ノ瀬	端正な顔立ちをした男から柔らかな笑みが消える。 たぶん年上の人だと思うけれど、顔立ちが整っている分表情が消えると冷たく、畏怖さえ覚える迫力がある
54	弥彦	「ああ、すみません。別に問いただすつもりも、責めているつもりもないんです。これは私の癖でして」
55	一ノ瀬	「いえ、怪しいのは自分でもそう思いますし」
56	弥彦	「とはいえ、このままというわけにもいきませんね。 幸い今は部屋も多く空いていますし、まずは休んだ方が良いでしょう。時間も時間ですので簡単なものしか出せませんが、食事を取った方が良さそう」
57	一ノ瀬	「えっ、でもそれは……」
58	SE	空腹音
59	一ノ瀬	食事……その言葉で一気に空腹感が押し寄せて来る。足も痛いし、坂を歩き詰めだったからか背中まで張っている。正直に言えば願ったりなんだけれど
60	弥彦	「遠慮する必要はありませんよ。 ここは貴方のような学生が集う場所であり、私はそれらを導く教師ですから」
61	SE	場面切り替え
62	SE	歩行硬い遅
63	一ノ瀬	「すみません本当に」馳走になってしまっ

64	弥彦	「気にしないでください。先ほども言いましたがここはトリウィウムです。貴方のような人を導くことこそが存在意義みたいなものですから。食堂の奥で目を光らせていたあのおばちゃんも貴方ことを心配していましたよ。初対面の人にとっては中々そうは見えないであろうというのが残念なところですが」
65	一ノ瀬	「あはは……」
66	一ノ瀬	食堂から歩いてくる途中、広い敷地に並んだ建物の中にはまるで教室のように机や椅子が整然と置かれた部屋が幾つも連なっている建物があった。トリウィウム……聞き覚えの無い言葉だけど、さつき教師って言うていたし、本当に学校なのかもしれない
67	弥彦	「今後はこちらの部屋を使ってください。 中にあるものは好きにしてくださいて構いません」
68	一ノ瀬	中庭らしき庭園を横切り食堂よりも大きな建物の中、その一室の前で立ち止まる
69	弥彦	「今日はもう遅いですから、話は明日にしましょう。私も非番なので時間もお任せします。 さっきの食堂にいれば誰かしら人がいるはずですし、迷わない程度なら学舎の中を見学していただいても構いません。 食堂の横に職員の準備室がありますから、都合が良い時に来てくれると助かります」
70	一ノ瀬	「そんな自由にさせてもらってもいいんでしょうか？」
71	弥彦	「構いませんよ。今は春休み中で生徒達はいません。無用な混乱も起きないでしょう」
72	弥彦	「もともと、たとえそうでなくとも貴方がそのような人だとは思っていませんが」

73	一ノ瀬	「あ、ありがとうございます……」
74	SE	木扉開ける
75	SE	木扉閉じる
76	SE	場面切り替え
77	SE	歩行硬遅
78	一ノ瀬	「石造りの部屋だ……。 靴も外からそのままだったからもしかしてと思ったけれど」
79	一ノ瀬	石材を積み重ねて造られた壁も、吊り下がっているランプも、 木棚に並ぶ小物も。どれも似たようなものさえ見たことがない
80	SE	本を取り出す
81	SE	ページをめくる
82	一ノ瀬	「だめだ……本の中身もさっぱりだ。英語ですらないなんて。 やっぱりどこか知らない外国なのかな……」
83	SE	ベッド軋み音
84	一ノ瀬	荘厳な外観だけでなく壁の内側、建物の中まで最初に感じた城という イメージそのままだ。中世ヨーロッパ、ゴシック建築。教科書の中に 並んでいた遠い現実、空想の中に溢れていた日常が目の前にある
85	SE	衣擦れシーツを擦る音
86	一ノ瀬	「だとしてもどうして……」

87 一ノ瀬

そもそも僕はどうかやってここまで来たんだ？
修学旅行先ではぐれた？ いや修学旅行なんて来年の話だ。
行先はドイツがいいな、なんて軽く考えていたけど、
一人で海外を彷徨う度胸なんてあるわけもない

88 一ノ瀬

改めて自分の記憶を遡ってみても、あの草原を歩いていたところで
それは途切れる

89 一ノ瀬

どう考えてもおかしい。それに今後って……………

90 一ノ瀬

「とにかく、話を聞かないと何も始まらない」

91 一ノ瀬

「そういえば……………ん、あの人の名前も聞いて……………（すう……………）」